

## <ジョゼフ=ニコラ=パンクラス・ロワイエ (1703-1755)>



作曲家、演奏家としての人間は音楽を通じて「人間と動物、人間と機械の境界」を越えるか、それらの問いに向き合ったジョゼフ=ニコラ=パンクラス・ロワイエ (1703-1755) についてご紹介します。

ロワイエはサヴォイア公国（現在のイタリア・ピエモンテ州）のトリノ生まれ、1725年にパリへ移住し、漸く経った1751年にフランスに帰化しています。1734年には maître de musique des enfants de France すなわちルイ15世の子供たちの音楽教師に任命され、1748年からはヴァイオリニストのジャン=ジョゼフ・ド・モンドンヴィルと共に、コンセール・スピリチュエル（1725年のフランスで設立された、今に続くコンサートのはじまりとなる公開演奏会を組織する団体）の運営に携わるようになります。1730年代と1750年代を通じてパリ・オペラ座にて6作のオペラを作曲し、中でもバレエ《グレナダの女王ザイード Héroïque Zaïde, reine de Grenade》は最も有名です。1753年には栄誉ある王室音楽監督に、同年、王立歌劇場管弦楽団の監督に任命されるなど、当時フランスで最も高い評価を得ていた音楽家の一人でした。

## <チェンバロを共鳴する人体モデルとして描いた作曲家>

チェンバロ音楽や楽器成立の黄金期を迎えた18世紀のフランスでは、医師で哲学者でもあったジュリアン・オフレ・ド・ラ・メトリーが1747年に発表した『人間機械論』（人間の心の動きも肉体の動きも物理的に分析でき、人間は一種の自動機械であるという考え）がセンセーションを巻き起こすなど、「人間と動物、人間と機械の境界」についての話題が当時の多くの人々の関心を集めていました。

楽器に描かれた動物や植物の絵画、弦を弾く爪は鳥の羽の軸で作られ、鍵盤は牛骨や象牙、また黒檀などで作られていて、楽器そのものが人間と動物・自然と深く結びついた存在であったチェンバロの楽器製作においても「人間と動物、人間と機械の境界」についての議論は及んでいました。

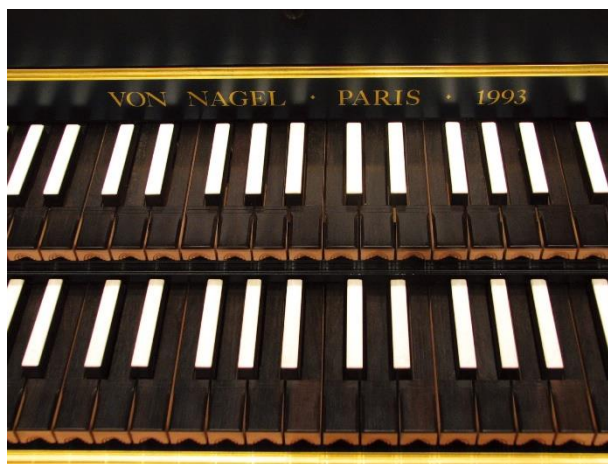
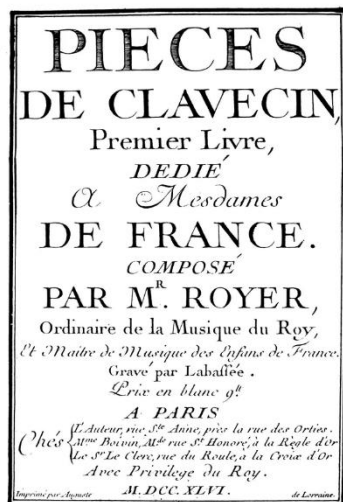
ロワイエは、チェンバロを繊維状の振動する神経が張り巡らされた、共鳴する人体モデルとして捉え、1746年に





出版された『クラヴサン曲集第1巻』に収められた楽曲『めまい』では、神経や脳の解剖学的な視点を取り入れ、18世紀的な感性を音楽的に表現しています。ロワイエは人間も、動物も、機械も身体感覚は持つことはできるものの、人間だけが持てるものとしての意識に着目し、意識は記憶や想像を意味づけるものと捉え、この作品を通じて実証実験を試みています。チェンバロは、“神経”の弦で感知する体として働き、過剰な刺激や衝撃を受けることで制御不能に陥る身体感覚を取り込む一方で、それを処理することができず、人間だけが持つ意識の基準を満たすことができないことを体現しています。

『スキタイ人の行進 La Marche des Scythes』は、1739年に作曲された彼の代表作『ザイド、グラナダの女王 Zaïde, reine de Grenade』の3幕5場から『トルコ人のためのエール Air pour les Turcs』を元にして編曲された作品ですが、大幅に手が加えられています。編曲の際にモデルとなったのは、原曲の「トルコ人」ではなく、「スキタイ人」。スキタイ民族は、ユーラシア大陸の中央部にある黒海北部からカスピ海北部、現在のウクライナからロシア、カザフスタン地方にまで広く及んでいた遊牧民族で、紀元前8世紀～紀元前3世紀頃まで繁栄した遊牧騎馬民族です。ジャン＝フィリップ・ラモーが1735年に有名なオペラ『優雅なインドの国々』を作曲するなど、当時異国文化への関心が高まっていた時流において1746年に作曲され、『クラヴサン曲集第1巻』に収められたチェンバロ史上最も難易度の高い、超絶技巧を駆使して作られた作品の一つです。両手10本の指を一度に使用する幅広い音程の和音が繰り返し書かれており、高い身体性を要する作品となっています。



文章：小川加恵